



2010年度で世界シェアトップを目指す

◆会社概要と企業理念等

当社は旧・大沢商会の子会社である研究所の技術の流れを引き継いでいる。1992年に現在の親会社である「(株)イマジカ」という映像サービスの会社が、当社フォトロンに資本参加、また、1997年に現ジャスダック証券取引所に上場した。その後、アイチップス・テクノロジー(株)等の子会社ができて、グループは当社および子会社4社で構成されており、従業員数は単体で150名、連結でも177名の小ぶりな企業である。

当社は企業理念として「顧客満足による信頼の創造」をポリシーに掲げ、顧客、株主、協力会社、地域社会の皆様、そして社員家族との信頼の創造、継続を経営の基本方針としている。また、利益の追求ではなく、「顧客の業務効率の向上に貢献」することをミッション（使命）と定め、ポリシーに則りこのミッションを追求することにより、顧客との深い信頼関係を構築し、継続することが社業の発展につながると考えている。

こうした中でビジョン、会社の将来像として、どこまでも画像にこだわり、ともすれば、メーカーは種々の技術があるために多岐に発展しがちであるが、当社はあくまでも映像にターゲットを絞って力の分散を防ぐ形で経営に当たり、業績の向上に努めている。親会社のイマジカも映像の会社であり、一貫して画像・映像にこだわったグループの枠の中で頑張っており、理念にこだわった経営を行っている。

◆決算概況と事業内容

2006年3月期決算の概要は、売上高65億38百万円（前期比4.9%増）、売上総利益34億65百万円（同10.2%増）、営業利益6億75百万円（同34.9%増）、経常利益6億52百万円（同22.0%増）、当期純利益3億55百万円（同44.6%増）となっており、いずれも従来の記録を更新した。ただ、想定以上の大型受注などがあって、やや実力以上の結果が出たと認識している。また、1株当たりの当期純利益は48.20円（前期31.24円）となった。

貸借対照表においては、受取手形や売掛金の圧縮による現預金の増加を主因に資産合計が4億81百万円増加して49億43百万円となったほかには特記事項はみられない。また、連結キャッシュフローにおいて、営業活動によるキャッシュフローは約13億円増加して12億35百万円の収入、投資活動によるキャッシュフローは固定資産の取得等で2億13百万円の支出、財務活動によるキャッシュフローは自己株式の取得などにより1億9百万円の支出で、現金および現金同等物の期末残高は、前期末比9億17百万円増加して17億95百万円となった。このように貸借対照表およびキャッシュフローに関して問題はなく順調に推移している。

当社の事業セグメントは、大きく分けて映像情報機器事業とLSI開発事業の二つで、LSI開発事業は子会社のアイチップス・テクノロジー(株)で行っており、本体では映像情報機器事業を行っており、「イメージングシステムズ」、「ソリューションシステムズ」および「プロフェッショナルシステムズ」の三つの部門に分かれている。なお、LSI開発事業もその中身は映像に関連したLSIを取り扱っている。

本年3月期のセグメント別売上高は、イメージングシステムズが34億3百万円（売上構成比52.1%）、ソリューションシステムズ9億41百万円（同14.4%）、プロフェッショナルシステムズ11億12百万円（同17.0%）、LSI開発事業10億80百万円（同16.5%）となっており、イメージングシステムズが過半の売上を占めて当社の主力事業となっている。

この一番大きく伸びているイメージングシステムズ事業の中身を一言で言えば、高速度デジタルビデオカメラの製造販売であり、1秒間に30コマの普通のビデオに対して、当社の高速度デジタルビデオカメラは1秒間に1,000コマ、あるいは10,000コマという超高速で映像を取り込むことができ、多くの分野での研究開発、解析等に利用されている。

世界市場は日本、北米、欧州で3等分できる市場規模ととらえており、現在の当社の売上高は国内が14億円、北米が9億円、欧州が8億50百万円、その他アジアが2億30百万円であるから、まだ北米・欧州といった海外市場において伸びる余地があるとみている。この市場は研究開発分野が多いほか、ミリタリ分野、自動車の衝突、工場の生産ラインのトラブル発見・監視などの解析にも使われており、その技術の応用などにより、

バイオ・ナノテク分野にも市場は拡大している。

競合会社は、世界には当社を含めて5社あり、日本2社（当社を含む）、米国2社、欧州1社という状況である。市場規模は世界全体で数百億円程度とみており、技術力・販売システム・ブランド強化を課題として現有市場における地位の強化を図り、2010年度のあるべき姿として研究・応用分野での世界シェアトップに躍り出たいという計画を立てている。

ソリューションシステムズ事業では、CADシステムとして設計・製図からプレゼンテーションまで、豊富なラインアップの図脳CADシリーズの開発・販売を行っている。また、e-Solutionとして独創的な映像技術を用いた、動画像ナレッジマネジメントシステムの開発・提案・販売を行っており、大学・予備校における講義の自動記録システム、マニュアル作成など教育機関を中心に順調に推移している。ソリューションシステムズ分野の流れとしては、従来のCADを中心としたものは顧客数も3万件を超えており健在で、約10百万円の売上を維持しているが、市場自体の成長性には疑問があり、2010年度のあるべき姿としては従来型のCAD以外での事業再構築を実現させたい。

プロフェッショナルシステムズの分野では、放送局をはじめとして映像を加工する市場に、いわゆるプロの映像をつくるための機器を提供している。メインは従来から輸入商品であり、ベルギー EVS社や英国Cintel社からテレビ放送用制作・編集システムなどを輸入して売上を維持してきた。また、医用画像関連機器分野において、循環器系医療に用いられる動画データの作成・表示・解析・保存・運用・カルテ作成に対応する製品を提供して順調に伸びている。

また、LSI開発事業は、子会社のアイチップス・テクノロジー(株)において、映像・画像処理向け汎用LSIの開発・設計・製造・販売を行っている。大手電機メーカーのほとんどが顧客であり、特に映像関連ということで液晶プロジェクターやプラズマディスプレイのような平面型の映像表示装置で解像度変換の処理に使用されているほか、画像の圧縮伸張用のチップは複写機やプリンターなどに、メモリーコントローラは業務用カメラ・映像処理装置などに使用されている。

2001年に連結子会社となって初年度は11億円の売上があったが、その翌年は7億60百万円に落ち込み、その後は俗に「シリコンサイクル」といわれる4年周期の増減パターンを映じている。大手電機メーカーを主要顧客としているため、内製化の動きにも左右される。新たな市場としてアミューズメント市場、すなわちパチンコ・パチスロ業界での採用に向けた活動を行っており、今年度あたりから数字に表れるものとみている。

以上が各セグメントの状況であり、「ニッチな市場を極めて、世界トップレベルの開発メーカー」となるべく努力しているところで、Cプロジェクトという中長期構想を定め、その売上高イメージでは2010年度に100億円を目標としている。100億円達成には高速度デジタルビデオカメラならびに、LSIにおけるアミューズメント市場などの新規市場の開拓と内製化されないような製品を電機メーカーに提供することが鍵になると思われる。

また、開発投資を当社とアイチップス共に非常に重要視しており、研究開発費の投資増は不可欠と考え、今期、すなわち2007年3月期は当社が7億20百万円（前期6億17百万円）、アイチップス3億80百万円（同3億22百万円）を予定している。

◆業績予想

上記の諸情勢を踏まえて今期の連結業績は、売上高を68億円と前期65億38百万円の4%増を見込んでいるが、営業利益は6億円（前期比11.2%減）、経常利益も6億円（同8.0%減）と前期をやや下回る予想となっている。それは前期が為替差益や大型受注要因によりやや出来過ぎであったためである。この結果、当期純利益は前期比1.3%増の3億60億百万円となり、1株当たり当期純利益は49.33円を予想している。

（平成18年5月31日・東京）